

照らされ導かれて

愛知専門尼僧堂堂長
塩尻市無量寺住職 青山 俊 董

数日前、名古屋駅でタクシーに乗りましたら、運転手さんが私の姿を見て「坊主やってるんですか？」と強い言葉で聞くので、「坊主は職業じゃない。だれもがたった一度の人生を最高に生きたい、最後の落ち着き場所を求めたいという生き方がこの姿になった」と申しました。

「私は宗教が嫌いだ。宗教は人間がつくったもの、それに人間が縛られるのはおかしい」と続けるので、「宗教は人間がつくったものではない。人間が見つけ出そうと出すまいと行われている天地悠久の真理・働きを発見し、目覚めたただけだ。何もないうところからつくり出したものなら、お釈迦様やキリスト様がどんなに立派でも、二千五百年あるいは二千年前という時代的制約、インドやイスラエルという地理的制約から一歩も出ることはいけません。宗教とは宗とする教えと書く。ご利益信仰などは違ふ」と申しました。たとえば仏教は二千五百年の歳月を越えてきた。明日の人類を救う宗教は仏教だと、世界の心ある方々が言っております。ただし長い間には垢も付く。

運転手さんは仏教のすばらしいところを尋ねようとせず、垢だけを見て批判されたのでした。私たちが気づく気づかないにかかわらず、もともとから授かっているものを「本具」といいます。本具の尊い命を生きて、働きをいただいているけれども、自覚にのぼらないと命の方向付けを誤ることがあります。法然上人は「月かげの いたらぬさとは なけれども ながむる人の心にぞすむ」と詠まれました。はじめから平等に働きのまっただ中に包まれているのに、こちらの心一つで月の光をいただけない人がいる。問題はお月様ではなく、こちら側にあるのです。新約聖書にも「求めよ、さらば与えられん」とあります。私は若い時、仏の教えは広大無辺の慈悲であるのに、尋ねようとする心の立ち上がりが無いとただけな条件付きでよいか、と疑問でした。けれども最近、教えははじめから開かれているが、求めようとアンテナが立ち、スイッチが入り、受け皿の準備がないとただけなのではないか、と思うようになりました。

求める背景を一つ挙げれば、「苦」でしよう。苦に導かれて心を立ち上げ、苦しみがなければ求道心もおきず、聞く耳も開かれない。苦は仏様と与えて下さった慈悲のプレゼントなのです。

江戸末期、大阪の破れ寺に住む禪師のもとへ、大金持ちが人生相談に来た。いろいろ悩みを訴えるのだが、禪師は飛び込んできた蛇ばかりを見ておられる。立て付けの悪い戸の隙間や破れた障子のどこからでも外へ出られるのに、蛇はここからしか出られないとばかりぶつかっては落ちる。やがて禪師はさりげなく「蛇はかわいそうであら。でも人間も蛇と似たことをしている……」とつぶやくと、金持ちはハッと、畳に頭をすり付けたという。苦しみ悩みのおかげで、蛇でしかなかった自分に気づくもう一人の自分が生まれる。この目覚めたもう一人の自分を育てなければなりません。

ところで気づかせていただくことは多いけれど、私たちが気づくことができるのは、ほんのその一部だとの謙虚さも必要です。真理は一つですが、切り口の違いで争ったり、切り口しか見えないものです。話を一生懸命聞いていても、自分が持ち合わせている経験の角度の範囲内ではないただけなのという自覚が大切で

す。ニュートンは科学の知識があったから引力を発見できたのです。山里にのみ住む人は太陽は山から昇って山へ沈み、海辺の人は海から昇って海へ沈むと思っています。また自己中心の身勝手もなかなか抜けません。集合写真を見るとき、まっ先に自分の顔を探し、うまく撮られていれば他人はどうでも、良い写真です。幽霊の絵を見る機会がありました。おどろ髪を後ろへ引きずり、両手をお前へ出し、足が地に着いていません。過去を心の荷物として引きずり、未

来の取り越し苦労をし、今ここを限りなく取り逃がしている姿です。前後を裁断して、今まさになすべきことをなせと教えるのが幽霊でした。

求め求めて人生の善き師と出会い、人から人へ感動の中で生きたものとして伝わる仏の教えに照らされ導かれながら、今この一歩を精いっぱい歩んでいくことが最も大切です。はじめからいたたいっている大いなる働きは、失って見えないと気づきません。見えることのすばらしさ、聞こえることのすばらしさ……。一つ一つが途方もない天地いっばいの働きの力によるものだと思わせていただければ、こんな豊かなことはありませぬ。この働きこそ、「南無阿弥陀仏」というのです。

(十夜法会法話・無明塾から)